

修士論文
2013年7月
(要旨)

高齢者における社会活動の変化を規定する要因

指導 芳賀 博 教授

老年学研究科
老年学専攻
211J6010
古宮 昌視

目次

I. はじめに	1
1. 背景	1
2. 研究目的	2
3. 研究意義	2
II. 研究方法	2
1. 研究方法	2
2. 分析方法	3
III. 結果、考察、結語	4
1. 結果	4
1) 対象者の属性	4
2) 対象者の健康状態	4
3) 対象者の社会関係特性	4
4) 初回時、追跡時の社会活動 6 項目の状況	4
5) 初回時、追跡時の社会活動合計点に関する相関関係	5
6) 追跡時の社会活動合計点に対する重回帰分析	5
2. 考察	6
1) 社会活動の変化に関する規定要因	6
2) 社会活動の変化と地域貢献感	6
3) 社会活動の変化とソーシャルサポート	6
4) 社会活動の変化のまとめ	7
3. 結語	8

引用文献、資料、謝辞

はじめに

今後、長寿社会に社会活動を通し、高齢者を大切にする視点は、高齢化が進むわが国では重要な見方の一つであろう。社会活動の維持、充実・拡大のためには、既存の知見に加えて、社会活動の時間的な経過に伴う、変化の要因を検討する縦断的研究による知見が求められる。しかし、高齢者の社会活動の変化を捉えた研究は緒についたばかりである。

研究目的

高齢者による社会活動の変化を規定する要因について明らかにすることが目的である。

研究意義

この研究で特定化された知見は、長期的、ヘルスプロモーション的に社会活動を捉え、地域ケアを推進していくときの一つの指標になり、その材料を提供できることによって、高齢者と地域に利点を還元できるであろうと考えている。

研究方法

神奈川県のはぼ中心に位置する中核都市、Z市H地区を対象地区とし、地域在住の65歳から79歳までの全ての高齢者を対象に、2年間の縦断研究を実施した。基本属性として性別、年齢、配偶者の有無、世帯構成、現地区への在住期間、教育歴、収入のある仕事の有無、経済的ゆとり、健康指標として健康度自己評価、健康関連QOL尺度（身体的健康サマリースコア、精神的健康サマリースコア）、老研式手段的自立尺度についての指標を使用した。社会関係に関する指標には、ネットワーク合計点、ソーシャルサポート合計点、近所の人との交流〔会話〕、地域貢献感得点を取り上げた。社会活動は「いきいき社会活動チェック表」に準拠し、6項目の合計得点で評価した。分析方法は追跡時の社会活動合計点を従属変数に、初回時の社会活動合計点及び性、年齢を統制変数、健康指標及び社会関係指標を独立変数とした重回帰モデルにより、分析を進めた。

結果

分析の結果として、社会活動合計点は初回時、追跡時ともに女性のほうが有意に高い結果を示した。また、追跡時の方が初回時より有意に得点が高かった。初回時には、性別、ネットワーク合計点、ソーシャルサポート合計点、近所の人との交流 [会話]、健康度自己評価、身体的健康サマリースコア、老研式手段的自立得点、地域貢献感得点と社会活動合計点との間に有意な相関関係が見られた。追跡時に関しては、ソーシャルサポート合計点を除いて、初回時と同様の項目において社会活動合計点との間に有意な相関関係を示した。これら初回時及び追跡時のいずれかに関連があった変数を説明変数、初回時の社会活動合計点、性、年齢を統制変数とする追跡時の社会活動合計点に対する重回帰分析を行った。その結果、プラス要因として、初回時の社会活動合計点、地域貢献感得点が影響しており、マイナス要因としてソーシャルサポート合計点との関連が認められた。

考察

本研究にて、初回時の性、年齢、社会活動合計点の影響をコントロールしても、地域貢献感が高いことが社会活動のプラスの変化に影響することが認められた。地域貢献感を高めることは高齢者の社会活動を維持・充実させるうえで有効な方策になると考えられる。また、高齢者へのソーシャルサポートには社会活動を抑制する一面があることが示唆された。それは、体調の変化や健康度の低下によるソーシャルサポートの増加が、高齢者の依存傾向を促すことと、社会活動のマイナスの変化とが間接的に結びついた結果とも考えられる。

結語

総括すると、地域貢献感があることが、高齢者の社会活動を支えることになること、今回の研究でわかった。従って、各自の地域貢献感を育み、その気持ちを大切にすることは、社会活動の維持・向上に欠かせないことでもあることを、一つの理解として捉えて、持続可能な長寿社会においての一つの方策に、社会活動の展開が、その役割の一部を担うことも今後、期待される。

そして、ソーシャルサポートによる弊害の一面を考慮に入れながら、社会活動による高齢者の活動役割の期待、本人の意思尊重、役割の維持・遂行の促進を行うことは、これからの社会活動の展開には必要不可欠であり、長寿社会での、新しい可能性を社会活動に見ることもできると考えられる。

引用文献

- 1) 内閣府：平成 20 年度高齢者の地域社会への参加に関する調査
(<http://www8.cao.go.jp/kourei/isiki/h20/sougou/zenntai>) (2008).
- 2) 日本学術会議 提言：持続可能な長寿社会に資する学術コミュニティーの構築。
持続可能な長寿社会に資する学術コミュニティーの構築委員会. 平成 23 年 4 月 20 日.
- 3) 日下菜穂子, 篠置昭男: 中高年者のボランティア活動参加の意義. 老年社会科学, **19** (2): 151-159 (1998).
- 4) 針金 まゆみ, 小川まどか, 小林 廣美ほか: 高齢者の社会的活動への参加意義および参加状況と生活満足度との関連. 老年社会科学, **26** (2): 226 (2004).
- 5) 金 貞任, 新開 省二, 熊谷 修ほか: 地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因; 埼玉県鳩山町の調査から. 日本公衆衛生雑誌, **51** (5): 322-333 (2004).
- 6) 島貫 秀樹, 本田 春彦, 伊藤 常久ほか: 地域在宅高齢者の介護予防推進ボランティアと社会・身体的健康および QOL との関係. 日本公衆衛生雑誌, **54** (11): 749-759 (2007).
- 7) 橋本 修二, 青木 利恵 玉腰 暁子ほか: 高齢者における社会活動状況の指標の開発: 日本公衆衛生雑誌, **44**(10): 760-768 (1997).
- 8) 高橋 美保子, 柴崎 智美, 橋本 修二ほか: 「いきいき社会活動チェック表」による地域高齢者の社会活動レベルの評価. 日本公衆衛生雑誌, **47**(11): 936-944 (2000).
- 9) 木村 みどり, 山崎 幸子, 長谷川 美規ほか: 地域高齢者における運動器の機能向上プログラムの社会活動促進への介入効果. 老年社会科学, **33** (3): 395-403 (2011).
- 10) 杉原 陽子, 杉澤 秀博, 小林 江里香ほか: 高齢者の社会参加の変化と促進・阻害要因; 全国の在宅高齢者に対する追跡調査から. 老年社会科学, **22** (2): 240 (2000).
- 11) 李 相侖, 新開 省二, 藤原 佳典ほか: 2 年間の追跡研究による中高年者の社会活動性の変化に関連する要因. 老年社会科学, **28** (2): 263 (2006).
- 12) 杉澤 秀博, Jersey Liang: 高齢者の健康度自己評価の変化に関連する要因; 3 年間の追跡調査から. 老年社会科学, **16** (1): 37-44 (1994).
- 13) 岩永 俊博: 地域づくり型保健活動. 医学書院, 東京 (1995).
- 14) 杉澤 秀博, 柴田 博: 在宅脳血管疾患既往者における日常生活動作能力・抑うつ状態の変化に対する社会心理的予知因子. 日本公衆衛生雑誌, **42**(3): 203-209 (1995).
- 15) 小川 まどか, 針金 まゆみ, 小林 廣美: 高齢者の社会的活動への参加状況と妨害要因との関連. 老年社会科学, **26** (2): 225 (2004)
- 16) 出村 慎一, 野田 政弘, 南 雅樹ほか: 在宅高齢者における生活満足度に関する要因. **48** (5): 356-366. (2001).

- 17) 中島 正夫, 谷合 真紀, 長瀬 ゑり奈ほか：地域保健対策の検討に
PRECEDE-PROCEED モデルを利用した経験を通して得られたいくつかの知見.
日本公衆衛生雑誌, **51** (3) : 190–196 (2004).
- 18) 山城 久弥, 島貫 秀樹, 崎原 盛造ほか：沖縄における在宅高齢者の役割と生
活満足度の関連；沖縄県老人クラブ会員を対象に. 応用老年学, **3** (1) : 54–67
(2009).
- 19) 芳賀 博：高齢者保健・福祉 (5) 健康・生きがいづくり. 日本公衆衛生雑誌, **55**
(1) : 48–50 (2008).